

いま見るべきもの と考えるべきこと

緊急 対談

この大震災を どう捉えるか



赤坂憲雄

(民俗学者)

●あかさか・のりお 一九五三年東京都生まれ。東大文学部卒。東北芸術工科大学教授、同大東北文化研究センター所長を経て今春から学習院大教授。東北学を提唱し、雑誌創刊など多彩な活動を展開。福島県立博物館館長も。著書に『異人論序説』『岡本太郎の見た日本』『増補版 遠野／物語考』など。

●ひじかた・まさし 一九六二年北海道生まれ。東北学院大卒。フリーライターとして活動し、赤坂氏との出会いから『東北学』などを共に刊行。仙台に出版社「荒蝦夷」を設立し、多数の書籍を出版するなど東北文化の一大発信基地に育てる。著書に『阪神大震災を扱った』『つづひん物語』『瓦礫の風景』など。



土方正志

(出版社「荒蝦夷」代表)

数万人の死者と数十万の避難者を出し、浦々を壊滅させた地震と津波。その厄難はいったい何だったのか。あの日、仙台で被災して家と事務所を失った出版社の代表と、その窮状を知り、支援に動いた民俗学者。震災後に二人が初めて会えたのは二週間後のことだった。被災地から山形県鶴岡市まで出てきた土方氏と東京から飛んだ赤坂氏が、それぞれの体験と思いを語り合う。

被災者は大津波のあの映像を見ていない

赤坂 あの東日本大震災の日から、僕は東京の自宅に籠もって、書くという作業を続けていましたが、土方君は仙台でまさに震災の現場を生きてきたわけですね。加えて土方君はフリーライターとして、雲仙普賢岳噴火、奥尻島の津波、阪神・淡路大震災、三宅島や有珠山の噴火など、全国の被災地取材した経験がある。おそらく、今回見聞きしていることが、われわれとはまったく違うのではないかと思います。現場はどうですか。

土方 場所によってさまざまだと思います。一人の人間の目で見られる範囲は限られています。眼前の現場そのものは、ああ、このような現場は奥尻にもあった、神戸でも見たと感ずる瞬間もあるのですが、規模や範囲の大きさを想像すると、気が遠くなります。奥尻のときも青苗地区という集落が全滅しましたが、今度はあの状態が数百キロにわたって続いている。壮絶としか言いようがない。

揺れたのは、仙台駅東側にある事務所に行ったときでした。神戸より大きいと直感しました。阪神・淡路大震災では数十秒くらい揺れたと聞いていましたが、今回は三分とも五分とも言われているから、神戸より明らかに長かった。事務所の室内は本棚が総崩れ。自宅マンションは壁に大きな亀裂が入って鉄筋がむき出しになり、立ち入り禁止になったので行き場所がなくて車中で過ごしたり、近所のお寺の本堂でお世話になっていました。

翌日から一週間ほどは、一緒に避難していた女性社員の母さんが、宮城県南で一人暮らししていた自宅が全壊して避難所と知り合いの家を転々としていたので、その安全を確認しに行かなくてはならない、気分